

## 新刊紹介

田 中 和 也

### 吉岡栄一著『村上春樹とイギリス—ハルキ、オーウェル、コンラッド』

彩流社、2013年、204頁

2009年の『1Q84』の出版で『村上春樹インダストリー』ともいふべき熱狂が生じたこと<sup>1</sup>が示すように、言わずもがなだが村上春樹は日本で有数の人気作家である。その上、彼の作品は英訳されて広く読まれていることや、その背景に彼が愛好するアメリカ文学の影響が指摘されることも、周知のとおりである。事実、村上はトルーマン・カポーティやレイモンド・チャンドラーの作品を訳してきた。私も村上の手によるフランシス・スコット・フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』の新訳を読んだことがある。その訳者あとがきでは原文のリズムを活かす訳を目指したとあったが、私個人もリズム感を出すことが『ギャツビー』の訳では難しいのではないかと長らく感じていたこともあり、新訳版を実際に読み歓喜したのをよく覚えている。そうした「アメリカナイズされた作家」(3)という世評が強い村上作品だが、実はその中にはイギリス文学からの影響があると考え、とりわけてジョウゼフ・コンラッドとジョージ・オーウェルからのものを考察していくのが本書である。本書は三章構成となっていて、第一章「オーウェルと村上春樹」では『1Q84』とオーウェルの『一九八四年』(1949年)の関係が、第二章「コンラッドと村上春樹」では主に『闇の奥』(1899年)と村上の『羊をめぐる冒険』(1982年)との関係が、第三章「オーウェルとコンラッド」では両作家の亡命者意識が、それぞれ考察されている。以下、主にコンラッドに関係する箇所特に力点を置く。

第一章「オーウェルと村上春樹」では、『1Q84』と『一九八四年』という二冊のタイトルの類似を皮切りに、オーウェルが村上に与えただろう影響を考察する。実は、オーウェルの名前は『アフターダーク』(2004年)

と『IQ84』のそれぞれの数節を除けば、村上は作品でもエッセイでもほとんど言及していない。それなのに村上がオーウェルからの影響をうかがわせるタイトルをもつ作品を突然書いたのはなぜか。ここで著者吉岡氏は村上とオーウェルにはロシアへの関心という類縁性があることに注目する。村上の『ねじまき鳥クロニクル』（1992-95年）、『1973年のピンボール』（1980年）、『羊をめぐる冒険』（1982年）などではトロツキーやスターリンなどへの言及が出てくる。一方オーウェルは、1936年に発生したスペイン内乱に参加し、そこで目撃したスターリンの軍事的・政治的介入への幻滅を『カタロニア讃歌』（1938年）に書いたことで名高い。だが『一九八四年』が全体主義批判の毛色が強い政治小説であるのに対して、『IQ84』は「大まかにいえば宗教問題やロマンスも織りこんだ社会問題小説」（42）と言える。

こうした『IQ84』と『一九八四年』の違いが最も如実に表れるのが、後者では独裁者である「ビッグ・ブラザー」が君臨するのに対して、『IQ84』では「リトル・ピープル」なるものが登場することである。「リトル・ピープル」は登場人物や動物の口の中から登場する不気味な小人であり、「われわれ人間の心のなかに伏在する『闇』（＝『悪』）のメタファー」（58）だと解釈できる。宇野常寛氏の言うように、「リトル・ピープル」が「われわれ」の中に普遍的に存在することは、「ビッグ・ブラザー」が縦社会における独裁を象徴していたこととは対照的であろう（60）。村上自身がリトル・ピープルの正体を断言するのを避けたようにその正体は謎であるが、「われわれ人間の心の闇のなかにも潜んでいる、危険で邪悪なもの」（62）であることは間違いない。なお第一章では『IQ84』のタイトルの由来に魯迅の『阿Q正伝』（1921年）が関係しているだろうことや、『IQ84』というタイトルゆえのマーケティング戦略性も考察されているが、割愛する。

第二章「コンラッドと村上春樹」では、村上がフランシス・フォード・コッポラ監督の映画『地獄の黙示録』（1979年）を称賛していたことがまず注目される。この映画は実はコンラッドの『闇の奥』を下敷きにして、舞台をアフリカからベトナム戦争へと移したものだということは劇場公開当時から知られていたという。だが村上のこの映画評では『闇の奥』への言及は無い。ところが興味深いことに、村上は『闇の奥』も収録され

た『コンラッド中短篇小説集 1・2』をその出版当時の 1983 年に書評している。その中で村上は自分のコンラッド読書経験を生き生きと語り、コンラッド作品の中でも『ノストローモ』、『闇の奥』、『颱風』の三つを特に評価していたというのである (81-83)。こうしてコンラッドへの造詣の深さを村上は示していたのだが、実際に『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』(1985 年) や『神の子どもたちはみな踊る』収録の「かえるくん、東京を救う」(1999 年) では、『ロード・ジム』(1900 年) におけるボートのシーンや恐怖の描写への言及が見いだせるのである。あるいは『海辺のカフカ』(2002 年) におけるナポレオン軍のロシア撤退描写にも、『コンラッド中短篇小説集』三巻目に収録された「武人の魂」(1916 年) との類縁性を思わせるものがある。

そして、村上がコンラッドから受けた影響を最も如実に表していると考えられるのが、『羊をめぐる冒険』である。上下巻に及ぶ『羊』でコンラッドの名前が出てくるのは、下巻で主人公が「鼠」の別荘を探し当てた場面一カ所に過ぎない。こうして『羊』は一見コンラッドとは縁が薄く見える。だが著者はウラジーミル・プロップ『昔話の形態学』(1928 年) やジョセフ・キャンベル『千の顔をもつ英雄』(1948 年) などの物語構造論や、それらに影響を受けただろう蓮實重彦や大塚英志の村上論を踏まえつつ、実は『羊』と『闇の奥』とは物語構造上で強い類似性が見いだせると主張する。『闇の奥』では語り手マーロウが象牙商人クルツを救助する際のコンゴ川遡行が描かれる。この旅をマーロウの自己発見の旅であると意味づけたアルバート・ゲラード (Albert J Guerard) の 1958 年の批評を筆頭に、『闇の奥』の物語構造は長らく考察されてきた。その中でも著者は、ジェローム・セイリー (Jerome Thale) による『闇の奥』は聖杯探究譚に準拠しているという論に注目する。これはマーロウが困難を乗り越えて目的の人物であるクルツと出会う様は、円卓の騎士が冒険の末に聖杯を求める姿と類似しているという主張である<sup>2</sup>。村上の『羊をめぐる冒険』もまた、「背中に星形の斑紋のある羊」を探し出すための「宝探し」の旅だと解釈できる以上、『羊』で描かれる旅も聖杯探究と同種のものなのである (101-02)。

事実、『羊をめぐる冒険』と『闇の奥』の構造を精査してみると、類似点が多い。『羊』では星形の斑紋をもつ羊を探すのは上下巻で下巻に入ってか

らようやく始まり、物語は遅延されている。これほどの尺ではないにしても、『闇の奥』のマーロウの旅でも足止めに多く遭遇して、クルツに出会うことは中々できない。加えてこの遅延と結び付けられるシーンである、マーロウがアフリカに出立する前にブリュッセルの貿易会社に行く場面では、街の雰囲気や会社の雰囲気の不気味さが強調され、ダンテやウェルギリウスのような「冥府への下降」の始まりが示される(104)。他方、『羊』でも右翼の大物である「先生」の「屋敷」の不気味さやそこに至る道程が、異界とそこへ至るプロセスであることをにおわせている。また『羊』では主人公たちの援助者として羊博士が登場するのに対して、『闇の奥』でもクルツに関する情報を旅の途中のマーロウに提供してくれるロシア人青年が登場する。

これら二作品の類似からや、村上自身による書評から、彼のコンラッドへの入れ込みが推察できる。この推察がさらに確固たるものになるのは、さらに二つの要因がある。第一に、コンラッドも村上も自らが住む社会に対してアウトサイダー意識をもっているとうかがえる点である。コンラッドは祖国ポーランドからイギリスに帰化して、第三言語である英語で作品を書いた。一方、村上もエッセイ『やがて悲しき外国語』に記すところによれば、日本へのエグザイル意識があったがゆえに、長らくヨーロッパやアメリカに住む期間があったという(126-27)。第二に、村上が愛読してやまないスコット・フィッツジェラルドが、文学上の師としてコンラッドを敬愛していたことがある。事実、村上が新訳を果たした『グレート・ギャツビー』は、枠物語という点で『闇の奥』や『ロード・ジム』(1900年)との類似点を指摘されてきた作品なのである(131)。

最後に第三章「オーウェルとコンラッド」では、オーウェルの伝記的事実や彼に関する追想録などを主なエビデンスとして、オーウェルがコンラッドから受けた影響関係が論じられる。まず目を引くのは、オーウェルは死を目前とする中で、コンラッドの政治小説『密偵』(1907年)や『西欧人の眼の下に』(1911年)に関する評論を温めていたらしいという、友人たちの証言が存在することである(136-38)。現実には、オーウェルはコンラッドについての書評をいくつか書いている。オーウェルとコンラッドの影響を論じた研究は「国内外とも」に「皆無」に近い(例外として著者が見

つけられたのは井内雄四郎による 1985 年の論考くらい) だけに、オーウェルがコンラッドに関心を寄せていたというのはややもすれば忘れられがちである (150)<sup>3</sup>。オーウェルといえばスペイン戦争についてのルポルタージュ『カタロニア讃歌』や、全体主義を風刺した『動物農場』(1949 年) や『一九八四年』など、政治性ある諸作で名高い。実際にオーウェルが『動物農場』に寄せた序文にはコンラッドの『密偵』(1907 年) のスティーヴィーを思わせる一節があるし、『ロード・ジム』のドラミンを彷彿とさせる人物がオーウェルの『ビルマの日々』に登場する。

オーウェルとコンラッドとの関係を考えるにあたって注目すべき点で、著者が特に訴えるのは以下の三点だと思われる。第一に、オーウェルがコンラッドを読み込んでいたことが、いくつかのエッセイから見いだせることである。興味深いのは、オーウェルのコンラッド論が、著名なコンラッド研究の大御所たちの考えと響き合っていることである。オーウェルは 1936 年の書評からすでにコンラッドの人気の復活を予言していたが、その際にはコンラッドの文体は華美に過ぎるから今は人気が無いのだろうと指摘している。オーウェルのこの主張は、コンラッド再評価を決定づけた F. R. リーヴィス (F. R. Leavis) の『偉大な伝統』*The Great Tradition* (1948) の論考 (初出は 1941 年) を先取りしている (144-45)。また、オーウェルが『ナーシサス号の黒人』(1897 年) や『日脚』(1917 年) を論じた 1945 年の書評では、作家の絶頂期は 15 年ほどで、コンラッドの場合は 1902 年から 1915 年ごろだと論じている<sup>4</sup>。オーウェルはこれと似た考えを、ポーランド人亡命者向けの文学週刊誌 *Wiadomosci* の 1949 年 4 月 10 日号でも繰り返している (165-66)。この意見はトマス・モーザー (Thomas Moser) の「達成と衰退」(Achievement and Decline) 理論ではコンラッドの才能は 1914 年の『運命』から衰退がはじまったと主張されることとほぼ符合する (146-47)。

第二に、オーウェルとコンラッドには類似点があり、たとえば帝国主義批判や政治に対するペシミズムなどである (149)。それら類似点の中でも、両作家ともに女性描写を苦手としていたと評価されてきたことに著者は着眼している。コンラッドの『ノストローモ』のリンダや『島の流れ者』のアイサなどは猫の粗暴な面を想起させる描写がされている。一方、オーウ

エル『一九八四年』に登場する反党的な女性ジュリアも猫を思わせる所作をしている。ここには、コンラッドが祖国ポーランドのシェラフタ（地主）階級の保守性や男たちの海の世界を経験したことや、オーウェルが保守的なブルジョワ的家庭観を持っていたことが背景にあると思われる（156; 160-61）。

第三に、両作家のもう一つの共通点として、二人が抱えていたエグザイル意識がある。コンラッドが帝政ロシア支配下のポーランドで生まれたように、オーウェルは大英帝国統治下のインドに生まれ、二人ともやがて「外部」から来た「異人」としてイギリスに定住した（163）。定住の前には、コンラッドは船乗りとして世界を巡り、オーウェルはイートン校卒業後にビルマで警官になり、二人とも非ヨーロッパ社会で西洋植民地主義を目撃している。オーウェル自身、先に本紹介で言及した1945年の書評で、コンラッドはその出自ゆえに陰謀に満ちた政治を理解できたと述べている（164）。オーウェルはコンラッドの陸の作品、つまり政治作品をこの書評では評価しつつも、別の書評ではコンラッドのエキゾチズムも魅力のうち一つだと述べている。ただし、オーウェルが晩年の『一九八四年』まで全体主義を痛烈に批判したのに対して、コンラッドの場合は『闇の奥』あたりが政治思想の頂点であり、『密偵』や『西欧人の眼の下に』では革命嫌いや保守性が露骨に出ているのが対照的である。

最後に蛇足だと恐れつつ私見を申し上げますと、本書は、ややもすれば今日の日本では縁遠く感じられがちなコンラッド作品やその他外国文学の世界への入り口にもなっていると考えられる。実際に私自身、大学で教職課程の必要性から英語文学関係の授業を履修してその導入でコンラッドが触れられるまで、彼の作品を手にするのは殆どなかった。現状として、このような学問的・制度的なきっかけが無ければ外国文学に触れる機会が昨今では、特に若年層には、乏しいと思われる。そうした状況下で本書は、村上春樹を通じて外国文学への扉を読者たち—特に彼の作品を手にするだろう10代から20代の読者たち—に開くことになるのではないかと。事実、本書では『ダンス・ダンス・ダンス』にて言及されるジャック・ロンドンに触れる時に「社会主義者のアメリカの作家」(35)などと説明があったり、他にもアーネスト・ヘミングウェイとスペイン内戦との関係についても簡潔

に言及されたりしている (36-37)。またコンラッド研究者も一度は悩むであろう、Kurtz がドイツ語読みのクルツと呼称されるようになった由来にも触れられている (101-02)。これらさりげない気配りのために、外国文学に馴染みのない人もそれぞれの作家や作品の手触りの一端を感じることができる。本書を通じて文学の世界を読者に楽しんでもらおう、という著者の濃やかな目配りと意志を私は感じた。

## 注

- <sup>1</sup> 吉岡栄一『村上春樹とイギリス—ハルキ、オーウェル、コンラッド』(東京：彩流社、2013) 18。以下、本書からの引用は括弧内にページ番号を記す。
- <sup>2</sup> セイリーのこの論文は、キース・キャラバイン (Keith Carabine) が 1992 年に編集した *Joseph Conrad: Critical Assessments* の第 2 巻目に収録されているほか、1971 年出版の Norton Critical Editions 第 2 版の *Heart of Darkness* にもおさめられている。
- <sup>3</sup> この新刊紹介に当たって、オーウェン・ノウルズ (Owen Knowles) とジーン・M・ムーア (Gene M. Moore) による *Oxford Reader's Companion to Conrad* の “Influence on Other Writers” をチェックしたが、オーウェルの名前は出てこなかった。また『コンラッド文学案内』*The Cambridge Companion to Joseph Conrad* に収録のムーアの論考「コンラッドが与えた影響」“Conrad's Influence” にもオーウェルは言及されていない。これらコンラッド研究者必携の二つの論考にも登場していないことから、コンラッドからオーウェルへの影響は、少なくともコンラッド研究者には見落とされがちなかもしれない。ただオーウェルとコンラッドが古くから政治小説家として巨人とみなされてきたことは、アーヴィング・ハウ (Irving Howe) の古典的著作『小説と政治』*Politics and the Novel* (1957 年) で両作家に一章ずつ割かれていることから察せられる。
- <sup>4</sup> この書評 (1945 年) は、キース・キャラバインが 1992 年に編集した *Joseph Conrad: Critical Assessments* の第 1 巻目に再録されている。

## 参考文献

- Carabine, Keith, ed. *Joseph Conrad: Critical Assessments*. 4 vols. Mountfield: Helm, 1992. Print.
- Howe, Irving. *Politics and the Novel*. New York: Horizon, 1957. Print. [翻訳は、アーヴィング・ハウ『小説と政治』。中村保男訳。東京：紀伊國屋書店、1958 年]
- Knowles, Owen and Gene M. Moore. “Influence on Other Writers.” *Oxford Reader's*

- Companion to Conrad*. By Knowles and Moore. Oxford: Oxford UP, 2000. 168-71. Print.
- Moore, Gene M. "Conrad's Influence." *The Cambridge Companion to Joseph Conrad*. Ed. J. H. Stape. Cambridge: Cambridge UP, 1996. 223-41. Print. [翻訳は、ジーン・M・ムーア「コンラッドが与えた影響」。『コンラッド文学案内』。J. H. ステイブ編。社本雅信監訳。東京：研究社、2012年。363-95]
- Orwell, George. Rev. of *The Nigger of the 'Narcissus,' Typhoon, The Shadow-Line, Within the Tides*, by Joseph Conrad. *Observer* 24 June 1945. Rpt. in *Carabine*. Vol. 1. 641-42.
- Thale, Jerome. "Marlow's Quest." *University of Toronto Quarterly* 24.2 (1955): 351-58. Rpt. in *Carabine*. Vol. 2. 318-25.

(たなか かずや 近畿大学非常勤講師)